

岐阜県嚥下障害研究会
モグモグ通信
 No. 31 (2018. 1 発行)

2月4日小児領域、3月10日成人高齢者領域の研修、4月14日は2016年NHKプロフェッショナル仕事の流儀に出演の小山珠美先生の講演を予定!



発行所：岐阜県嚥下障害研究会
 事務局：土岐市立総合病院 ST 室

岐阜県嚥下障害研究会の20年の歩み

岐阜県嚥下障害研究会
 豊島義哉

岐阜県嚥下障害研究会は皆様のご理解、ご協力により今年で20年を迎えることができました。この機会を借りまして厚く御礼申し上げます。

当研究会は関係者がその理論と実際について研修および意見を交換し、摂食嚥下障害児者のQOLの向上のために摂食嚥下機能療法の充実・発展に貢献することを目的に、平成10年8月30日に設立総会をソフトピアジャパンセンター(大垣市)で開催しました。総会を挟んで、第1回学術講演会では愛知県嚥下障害研究会会長(当時)の太田清人先生(理学療法士)が「摂食・嚥下障害について」と題しお話をして下さいました当日は359人の関係者が集い、当初の予定を大きく上回るものであり、摂食嚥下障害への関心の高さを改めて感じました。

翌年は、第2回学術講演会として「摂食・嚥下リハビリテーションの実際」、「口腔内細菌と全身への影響について」と題して、講演会の形で開催した。3年目は、「摂食・嚥下障害者の食を考える」をテーマに第3回学術講演会を開催しました。そして、「岐阜県における摂食・嚥下リハビリテーションの現状調査」を県内の病院、診療所920施設、歯科診療所880施設、老人福祉・老人保健の老人施設131施設、小児施設および養護学校78施設、合計2009施設に郵送で実施しました。結果は、1. 嚥下食の有りは、老人施設の90.9%が最も多く、病院83.9%、教育機関61.5%の順でした。2. 検査・評価方法を実施していない施設は全体の79.6%でした。3. 摂食・嚥下訓練の実施有りは、病院の69.6%

が最高で全体では24.6%でした。4. 摂食・嚥下訓練における問題点では、危険不安、検査不十分、訓練不安などでした。5. 摂食・嚥下訓練を行っていない理由は、歯科・医科診療所・小児施設では対象者がいないことを、病院では訓練方法について、老人施設では訓練方法・検査ができないことが高率でした。これらの結果を受けて研究会は、1. 年1回の学術講演会の開催：県内5圏域を研究会役員が中心になり圏域内の関係者で実行委員会を立ち上げ、それぞれの地域特性に合わせて企画運営を行う(通算20回)、2. 年1回の初級課程講習会(通算20回)、3. 2年に1回小児領域を対象とした小児摂食機能療法講習会(通算9回)、4. 小児領域、成人・高齢者領域それぞれで系統的な勉強会の開催(小児通算49回、成人・高齢者通算52回)などに取り組んできました。平成18年からは、岐阜県介護予防推進・評価委員会専門部会「口腔機能向上部会」に参加し、岐阜県「介護予防」実践マニュアル 第三部「口腔機能向上」や岐阜県版摂食・嚥下セルフチェック表を作成することができました。

現在、会員も約270人にのぼり、職種も多職種にわたり、それぞれの地域で摂食嚥下障害に対して医療現場はもちろん、福祉、教育、療育のどの領域においても、摂食嚥下のコーディネータの役割を果たす会員(各専門職)も少なくありません。今後も摂食嚥下障害児者のQOLの維持、向上の一助となれるよう、顔の見える横のつながりを大切に、より一層の研鑽を積み重ねて参りたい所存です。

最後に、第20回学術講演会を盛会に開催することができましたことを大埜間勉大会長ならびに実行委員会の皆様に深謝申し上げます。

研修会レポート

日時：平成29年7月22日（土）13時～16時
 会場：朝日大学 1号館 第4大講義室
 講演：小児のVF・VE検査について
 ～基礎知識とその診かた～
 講師：勝又 明敏 先生（朝日大学歯学部教授）
 玄 景華 先生（朝日大学歯学部教授）

「第1回研修会小児領域に参加して」

岐阜県立岐阜希望が丘特別支援学校
 教諭 吉田 明永

「小児のVF・VE検査について」の研修会は、数年前にも参加させていただき、今回は2回目の参加でした。今回の研修は、前回の研修会の復習にもなり、また、新たな情報を得ることもできました。

勝又先生のVF検査の説明では、普段聞く機会のない放射線の基礎的なことや造影剤の種類、VF画像の評価項目などについて知ることができました。VF検査では被曝との関係から、被写体までの距離や撮影範囲、透視時間を極力短くすることに配慮が必要であり、それらを配慮しながら、口腔期や咽頭期の状況を細かく評価しなければならない大変さを学ぶことができました。また、玄先生のVE検査の研修では、検査の目的やVF検査との比較など、検査についての話や、検査を通じて評価と説明が重要であることや、検査によって食形態を判断することに有効であることを学びました。また、検査内容だけにとどまらず、摂食嚥下機能の発達段階や過程、摂食嚥下障害の評価法、経口摂取の重要性など、大変幅広い内容のお話を聞くことができました。

教員が、VF検査やVE検査の場を見る機会は少ないですが、検査がどのようなものなのか、検査によって何が分かるのか、検査の有用性はどうなのかなどを知ることは大切なことだと思います。摂食に課題がある児童生徒の摂食指導に毎日かかわっている私たちは、常に食事の様子を把握しておかなければいけません。摂食の様子に変化が見られたり、誤嚥や窒息のおそれがあったりするときには、その危険性をいち早く察知して、

よりよい支援を再考しなければいけません。そのようなとき、食形態や食具、姿勢など、見た目だけの観察や評価を行うのではなく、口に入った食べ物や、喉を通り食道に至るまでの様子を考えながらより細かく、総合的に判断する必要があると思います。そして、時には検査の必要性を保護者に伝え、勧めることも必要になります。今後も、幅広い知識をもち、子どもたちが安心して、楽しく給食が食べられるように、学び続けたいと思います。

「第2回研修会小児領域に参加して」

各務原市福祉の里つくし
 保育士 池戸 靖子

今回の勉強会は、広島市西部子ども療育センターの藤井先生の偏食支援のお話で、とても分かりやすく興味深い内容のものでした。その中で、『偏食が治る』と表現がされていたことに惹かれました。

私が担当している5歳自閉症のO君は、ご飯は温めてふりかけをかけないと食べられず、食べられる食材もごく少なく、ジュースが好きです。それも個性だと受け止めていましたが、家族と一緒に同じ食事ができてお母さんが作るお弁当も食べられたなら、もっともっと楽しく生活できるのに…、とっていた所、この研修を知り参加しました。

偏食が治るには、その子の摂食の観察、身体・栄養・発達状況、感覚の過敏性などをしっかり把握したうえで総合評価し計画を立てて実施していく事が大切と話されていました。

好きな食べ物ばかりを食べていては食べる幅が広がらず、食事時間や間食が定まらないと空腹

日時：平成29年12月3日（日）9:30～15:30
 会場：朝日大学 1号館 第4大講義室
 テーマ：発達障がい児における偏食、食事の問題と
 支援について～なぎさ園の取り組みから～
 講師：管理栄養士 藤井葉子先生
 広島市西部こども療育センター 食育研究会会長

の時間が分からず食事が進まない。1回の食事量を決めて、好きな物がなくなったら、なくなったことを伝え追加を出さないことで他の物にも手が出て食が広がるとの事でした。

早速できることから取り組みました。そして、O君は少しずつ変わってきています。常温のままで食べ



られる物があったり、パンや野菜、フルーツの受け入れも少しずつ進んだりして給食を完食できる日もあり、確実に食べられる食材は増えてきています。『偏食は治る』と、保護者とともに実感しています。

それでも、家庭ではついつい好きなものを与えてしまうことがあり、保護者と共通理解をしていく事が難しいと感じますが、しっかり連携をとりながら、O君の生きにくさが少しでも軽減できていろいろな場所でいろいろな人と食べ、健康的に生活が楽しめるように…お母さんの笑顔も増えるように支援していきたいと思います。

このような思いを引き出してくださった藤井先生に感謝しています。ありがとうございました

第20回 初級課程講習会 レポート

社会福祉法人いぶき福祉会 第二いぶき
 支援員 松尾 有紗

私は今年の4月から生活介護事業所で支援員として勤務しています。まだ福祉の業界が浅く摂食嚥下障害についての理解が薄かったのですが、今回の摂食嚥下リハビリテーションの講習会に参加して理解を深めることができました。講義では、食事場面でどういう場合に誤嚥につながってしまうのかを実際に食事をしている喉の映像を見たり、食事指導法として姿勢の工夫、食物形態の調整、摂食方法の工夫について教えていただき、現場での食事介助を振り返る機会になりました。摂食方法の工夫では食事介助は利用者と向き合うことが大切だと思いました。また、大前提に私たちでもそうですが、食事は利用者にとって楽しい時間ということを経験しなければいけないな

と思いました。それに伴って利用者が安全に楽しく食事ができる適切な介助ができるようになることが重要だと感じました。利用者本人のペースや量に合わせて食事介助を行うこと、また、利用者として「次は何食べたいですか?」「おいしいですね」と利用者本人の意思を尊重、代弁するような声かけをすることが大切だと再確認できました。演習では、とろみ水とかっぱえびせんを使って嚥下障害の模擬体験をしました。かっぱえびせんを唇を閉じずに食べる、舌を動かさずに飲み込む、上を向きながら食べるなど様々な食べ方を体験することで食べるには噛んで唾液と混ぜ合わせ嚥下がしやすい食塊を形成する咀嚼が大切だとわかり、咀嚼が上手くできない利用者の食べにくさ、飲み込みにくさを実感しました。また、この体験を施設でも実践させていただき職員全体で共有し食事介助について見直すことができました。まだまだ未熟な新米支援員ですが、今回の講習会で学べたことを現場で活かして利用者が安全に楽しく食事ができるように適切な介助ができるようになりたいと思います。

第20回学術講演会 高山大会 29.10.22
テーマ「食を考える」～温故知新 未来への挑戦～



藤島 一郎先生



宮本 謙先生



豊島 義哉会長

《午前》特別講演① 「嚥下障害の評価とリハビリテーション-最新のトピックスをまじえて-」
 講師 藤島 一郎先生 浜松市リハビリテーション病院 病院長

《午後》特別講演② 「岐阜県立下呂温泉病院摂食嚥下部会の取り組み」
 講師 宮本 謙先生 岐阜県立下呂温泉病院 口腔外科部長

記念講演 「岐阜県嚥下障害研究会の20年の歩みと今後の課題」
 講師 豊島 義哉先生 岐阜県嚥下障害研究会 会長



◁ サンプル配布



大埜間勉大会長



— 編集後記 —

今年もご後援を頂きました 岐阜県、岐阜県医師会、岐阜県歯科医師会、岐阜県看護協会、岐阜県栄養士会、岐阜県理学療法士会、岐阜県作業療法士会、岐阜県言語聴覚士会、岐阜県診療放射線技師会、岐阜県身体障害者福祉施設協会、岐阜県歯科衛生士会、岐阜県デイサービスセンター協議会、岐阜県居宅介護支援事業協議会、岐阜県老人福祉施設協議会、岐阜県老人保健施設協議会様には深く感謝申し上げます。(TOYO)